

## 留学生とカウンセリング (3)

—— 留学初年度の生活指導におけるカウンセリング活動の意義 ——

井上孝代・鈴木康明

(1993. 11. 1受)

留学生が激増するなかで、受け入れ側としての教育的環境の充実、生活上の条件整備が焦眉の急とされている。特に、在日留学生の生活・文化・心理・発達をめぐる問題に対して、どのような生活指導を行っていくべきかを明らかにする必要がある。この問題は、言い換えると、日本という異文化状況での留学生の適応援助のあり方、わけても心理的援助のあり方を日本の大学の条件下において明らかにする課題である。

Thomas & Althen (1989)は留学生の特徴として次の点をあげている。(1)移行期にある人間である、(2)受け入れ国との間に基本的な考え方や価値観の相違がある、(3)ソーシャルサポートの状況が特有である(家族とコンタクトが取りにくいなど)、(4)習慣的なコミュニケーションのスタイルが異なっている(①話題、②交流形式、③関与の深さ、④コミュニケーションのチャンネル、⑤意味のレベル)、(5)カウンセラーの役割についての概念が大きく異なる、(6)独自の問題と適応課題に直面する、の6点である。

留学生独自の問題と適応課題とは、①言語、孤立、文化ショック、地位ショックなどの新しい文化への最初の適応、②教育システムの違いによる学業面での困難、③地域社会での同国人の間におきる政治・宗教・社会的対立・摩擦、④戦争・政変・経済危機など、母国の事件の影響、⑤異文化間の男女関係、⑥社会的孤立、抑鬱、パラノイア、⑦固有の経済的困難、⑧出入国管理局への恐れからくる不安、⑨指導教員、ルームメイト、家主など受け入れ国の特定の人の関係からくるストレス、⑩新しい自由への対処(高文脈社会から低文脈社会に来たときなど)、⑪期待のプレッシャーへの対処、⑫母国の不幸(友、家族の死など)への対処、⑬卒業後の進路選択、⑭帰国についての不安などである。

留学生が、留学期間のすべてにわたって独自の問題と適応課題に直面するとはいえ、異文化への適応上のストレスが大きく、人格発達の課題がめまぐるしく変化するのは、留学直後より1年間の時期である。留学初年度が留学生にとって大

きな意味を持つことは、文化的適応研究のさまざまな文献からも実証されている（たとえば、Lysgaard 1956 など）。新しい生活条件に適応することのみならず、新しい文化的接触にも適応していくことが望まれるこの時期の留学生に対して、異文化において主体的・積極的に対応できる人格への発展を実現するよう援助することが、日本の教育機関の側に求められている。留学初年度は急激な環境変化によるストレスが多く、心理的適応の様々な問題が一人一人異なった形で生じてくるので、留学初年度の学生生活の流れに沿った系統的なオリエンテーションが重要である（横田 1992）とともに、留学生の個別の問題に沿った専門的なカウンセリング活動が必要である（鈴木、井上 1993）。

1992年4月に、東京外国語大学外国語学部付属日本語学校は東京外国語大学留学生日本語教育センター（以下、「本センター」と記述）に移行し、留学生生活指導部門が新たに設置された。筆者らは、1991年の11月・12月より新部門に配置予定の専任教官として採用され、旧日本語学校から本センターへの移行途中の時期より移行後の現在まで留学生の生活指導の業務にたずさわっている。図1は、留学生生活指導部門に期待された業務の諸課題を、移行期の1992年1月にまとめたものである。この中ではカウンセリング活動は5つの課題の1つとして位置づけられている。

本論文の目的は、第一に、本センターへの移行後1年以上経過した現段階で、筆者らのカウンセリング活動が生活指導部門の業務の中でどのようなものであったかの実態を明らかにすることにある（井上、鈴木 1993）。さらに、カウンセリング活動記録をもとに、留学初年度の生活指導におけるカウンセリング活動の意義を検討することが第二の目的である。

なお、「生活指導」という概念（浅野1986）は、留学生という青年の立場から見ると、自分達の適応（異文化適応を含む）を、学校・教職員から援助してもらう活動にほかならない。教育学で使われている「生活指導」という用語は、同じ日本文化の中で育った子ども・青年を対象としていることを前提とした指導という語感がある。一方、在日留学生の生活指導の場合は、背景となる文化や生活経験がまちまちであり特に個別のかつ文化的な対応が求められる。本論文は「生活指導」と同義の語として「適応援助」の語を用いた。

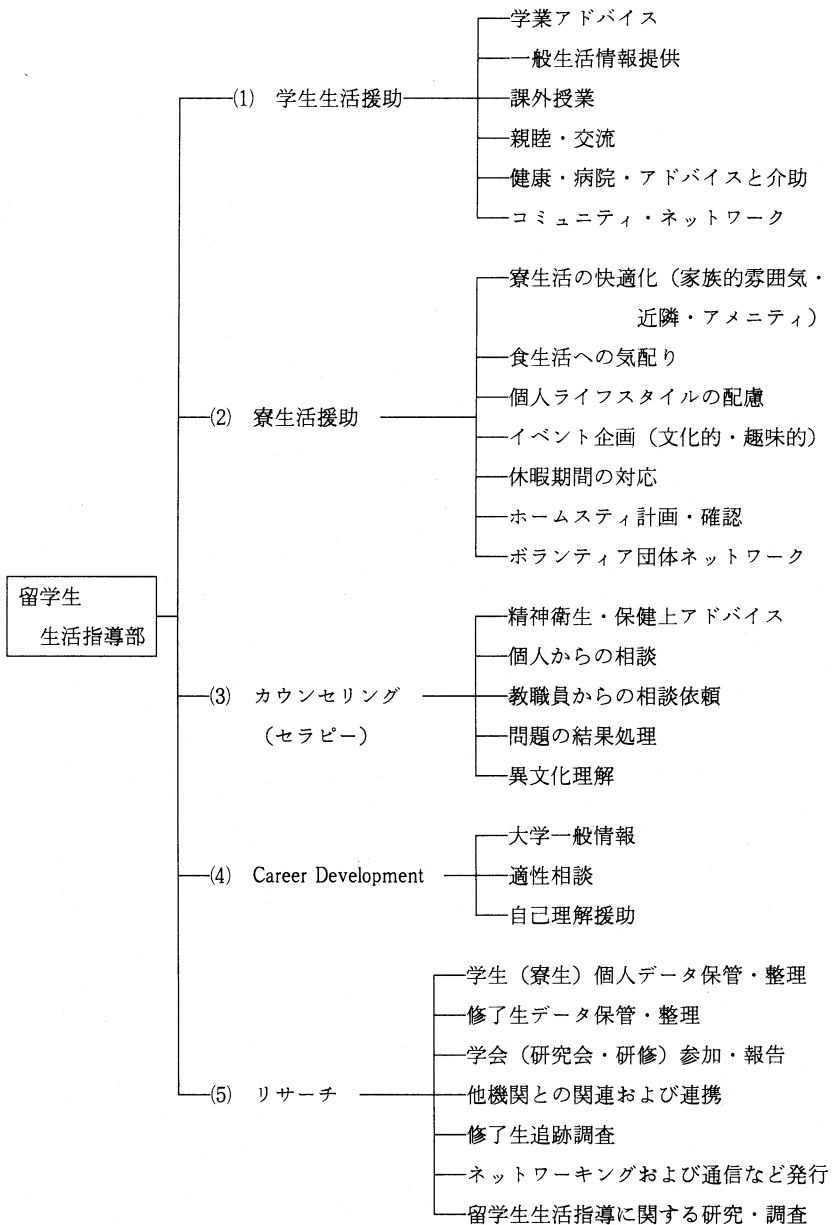


図1 留学生生活指導部門の活動内容

## 1. 留学生援助の実態：相談室利用状況

### (1) 本センター留学生及び生活指導部相談室の概要

表1は1992年度の留学生の内訳である。

表1 1992年度本センター留学生の内訳

	男性 37名		女性 14名		計 51名	
国籍	インドネシア	6	マレーシア	7	タイ	8
	フィリピン	7	ホンコン	2	ラオス	2
	シンガポール	4	ハンガリー	2	モンゴル	2
	バングラデシュ	3	オーストラリア	4		
	パプア・ニューギニア	1	ニュージーランド	3		
年齢	17歳	5	18歳	9	19歳	14
	20歳	13	21歳	9	23歳	1
			(平均		19.3歳)	
宗教	イスラム教	3	仏教	17		
	キリスト教	22	なし	9		
来日目的 (2つ選択)	日本の科学・技術を学ぶため				26	
	日本語を学ぶため				23	
	日本文化を知るため				18	
	学位を得るため				16	
	日本人について知るため				8	
	日本人の友人を作るため				6	
	その他				3	

本センターの留学生は、1年間におよぶ日本語・日本事情および専門科目の予備教育をうけ、修了後は国立大学へ進学する予定である。ただし進学大学については学生の意向をふまえながらも最終的には文部省が配置するので、かならずしも学生が自分の志望校に進学できるとは限らない。したがって、この進学をめぐる学生の不安・ストレスはきわめて高いものである。1992年度の学生の平均年齢は19.3歳であり、これは毎年ほぼ同様である。ただ、国によっては教育制度の違いから17歳で来日したり、国によっては20代になって来日する場合があります、国ごとに異なる来日時の年齢差や自己像（中川1992）のために、しばしば学校・寮生

活において人間関係のあり方や生活ルールの面で問題を生じることがある。国籍は例年東南アジアが最も多く、1992年度も全学生のほぼ8割を占めている。そのため、非アジア系学生が少数派としての被差別感を訴えることがあったり、留学生は日本文化とのバイ・カルチュラルな問題のみならず、留学生同士のマルチ・カルチュラルな問題も解決しなければならない。宗教的背景としては、82%の学生が宗教を信仰しており、食生活・寮生活において、たとえば男女意識の違いやイスラム教の祈りの習慣などに対し宗教的配慮が必要である。

来日目的で最も多いのは「日本の科学・技術を学ぶため」(51%)で、これは入学直後行った日本人イメージに関するアンケート調査および岩男・萩原(1988)により、日本人の「進歩性」が高く評価されていることと一致する。また、「日本語を学ぶため」、「学位を得るため」も多く、日本留学に対し帰国後あるいは将来に対して有利となるとの見通しがもたれていることがわかる。すなわち全体的に「日本文化や日本人を知る」ことより、日本留学を「自分の将来のため」と意味づけていることがうかがえる。

本センターは全寮制をとっており、寮棟は同じ敷地内に教室棟と連結している。そのため、学生には効率の良い学習環境が保証されている反面、常に「学校の中に居る」という緊張感が存在すると考えられる。なお、生活指導部門相談室は寮棟と教室棟の中程に位置し、原則として土・日祭日・休暇期間を除く毎日、午後から夜間にかけて開設されている。相談室の利用のオリエンテーションは、入学時に学生の母語を話す本センター修了生を交えグループワークの形で行っている。

## (2) 相談室の利用状況

表2は1992年4月から1993年1月までの本センター留学生の相談室利用状況(相談内容)である。のべ件数1064で、その内容は生活情報の提供といったことから勉学・進学相談、異文化理解教育、地域(日本人)との交流ネットワーク作り、そしてカウンセリングに至るまでの幅の広い構造的・連携的・専門的関わりが求められる。しかも留学生援助においては、実際の援助のみならず、留学生自身が異文化体験によってもたらされるさまざまな問題を解決していける能力を培うための発達援助的なカウンセリング活動が必要であろう。そのため我々は相談室に待機するだけでなく留学生に応じた発達(開発的)カウンセリング(神保, 1993)を行っている。

表2 相談内容

相談内容	のべ数
学校・寮生活	181
進学・成績・勉学援助	135
生活情報・生活援助	108
病気・健康	97
ストレス・ホームシック	95
コミュニティ・交流	77
家庭的雰囲気	70
異文化体験	64
友人関係	57
日本文化理解	40
旅行	31
日本人との人間関係	30
宗教	25
個人的な話	25
男女問題	18
金銭問題	9
その他	2
合計	1064

(3) 援助内容と援助者の役割

留学生の相談内容に応じて個人的、あるいは集団的に援助活動を行っている。その際、援助内容も異なり、果たすべき役割も異なっている。表3は相談内容に基づく我々の援助内容および役割を示している。

表3 援助内容と援助者として生活指導部門教官が果たした役割

援助内容	生活指導部門教官が果たした役割	のべ数	%
カウンセリング（心理的問題）	カウンセラー/セラピスト	264	24.9
コンサルテーション（寮/学校生活）	コンサルタント/教師	205	19.3
ガイダンス（進学、勉学）	教師/カウンセラー	171	16.1
アドバイス（異文化理解・交流）	インターメディエーター/アドバイザー	147	13.9
スキル/情報提供（生活/医療）	ソーシャルワーカー	137	12.8
サポート（家族的親密性）	カウンセラー/友人・家族	90	8.5
分類不能		48	4.5
合計		1064	100 (%)

援助内容は、青年期のアイデンティティ確立をめぐる自己理解援助、友人関係、ストレス、ホームシックなど心理的問題に対する援助が最も多いことがわかる。アイデンティティ確立の問題については、本センターの留学生が17歳から23歳までの青年期にあり、自国文化で築いたアイデンティティが日本という異文化の価値観においてしばしば修正と再確立を求められるため、強い不安と混乱を経験するためであろう。ストレスについては異文化ショック、勉学上の悩み、人間関係などによってもたらされ、多くの場合、過食・拒食・腹痛・生理不順・頭痛・肩こり・脱毛・湿疹・睡眠障害・脱力感などの身体的症状を伴っている。それらの身体的症状に対しては希望者にイメージ療法・自律訓練などの心理療法を行った。ホームシックは本センターの学生の多くが、以前全く親元を離れた経験がないこと、また、それを情緒的に癒すような親密な人間関係をもてないためと考えられる。これらの心理的問題に関して我々は、学生の滞在期間・日本語能力・文化的背景・発達の課題あるいは医療機関はじめ他機関との連携を考慮しつつ、カウンセラー・セラピストとして専門的援助を行っている。

寮・学校生活に関する相談内容への援助としては、学生委員会の組織化と運営の支援、課外活動への動機づけ、留学前後の異文化学習への教育的介入といった学生と学内外組織との相互理解や交渉といったいわばコンサルタント・教師としての役割が求められる。

進学・勉学上のガイダンスについては、教師として必要な情報を提供・指導したり、カウンセラーとして学生の性格・資質・適性についての相談を行う。この場合、留学生の来日目的や宗教観を十分考慮する必要がある。

異文化理解や交流活動の援助については、学生が異文化のもとで出会うさまざまな文化的コンフリクトの解決に役立つ知識を与え、異文化理解を助けるインターメディエーターとしての役割（田中、松尾 1993）と、地域のネットワーク作りや交流を助けるアドバイザーとしての役割が求められる。

その他、異文化のなかで生活するうえでの情報を提供したり、住宅・医療などの問題の解決を援助するなどソーシャル・ワーカー的援助（註1参照）、あるいは時に友人・家族の代替えとしての親密な関わりが求められることもある。

## 2. 異文化間カウンセリング活動

以上の相談室の相談内容および援助内容の記録から、留学初年度の適応援助において心理的問題に対するカウンセラーの専門的アプローチが決定的に重要であ

ることが明らかにされた。そこで、以下に留学生へのカウンセリング活動を行う際の課題について検討する。

#### (1) 異文化間カウンセリングの課題

カウンセリングとは「適応上の問題を持ち、その解決に援助を必要とする個人と、専門的訓練を受けて助力者としての資質を備えた専門家が面接し、主として言語的手段によって心理的影響を与え、問題解決を助ける過程」(奥田 1991)である。一方、文化的背景を異にする人たちへのカウンセリング、あるいは異文化にわたる状況下で起こった障害に対してのカウンセリングを星野(1992)は「異文化間カウンセリング」と定義している。佐野(1990)は、留学生カウンセリングの課題として、留学生の日本社会への適応援助を挙げている。

留学生援助におけるカウンセリングの位置づけ、理論的枠組み、方法論などについては今後明らかにすべきことが多い。とくにカウンセリングの中心的技法が共感性と言語性に基づくために、異文化間カウンセリングには、その両者をいかに実現するかという固有の課題がある。また青年期にある留学生の発達の課題も重視する必要がある。表4は留学生へのカウンセリング活動記録から得られた異文化間カウンセリングを行う際の課題をまとめたものである。

表4 異文化間カウンセリングの課題

言語的課題	<ul style="list-style-type: none"><li>日本語能力の問題 (感情表現, 抽象的表現能力)</li><li>媒介言語の問題</li></ul>
文化差の課題	<ul style="list-style-type: none"><li>クライアントの文化的背景の違い</li><li>「カウンセリング」に対する認識の違い</li><li>クライアントとカウンセラーの人間関係のあり方</li></ul>
発達の課題	<ul style="list-style-type: none"><li>青年期の発達課題 (自我同一性, 文化的アイデンティティ)</li><li>発達の視点</li></ul>

言語的課題としてはまず日本語能力の問題がある。留学生は日本語を始めて間もない時には、感情的表現がうまくできないことや、抽象的表現が十分にできないために自尊感情が傷ついたり、自己評価が低くなり強いストレス状態であることが多い。しかもそのこと自体をカウンセラーに正確に伝えられなくて、カウンセラーと問題を共有しにくい。また、その場合、媒介言語を何にするかという課



題がある。

文化差の課題については、クライアントの文化的背景、歴史的背景を十分に知ることが重要である。時に全く異質な価値観を有するクライアントに共感することが難しい場合もあり、カウンセラーとしての技量が問われる（大塚 1993）。また、カウンセリングそのものの受けとめ方が文化によって異なっている。アジア出身者の場合などは、カウンセリング制度に馴染んでいない場合が多い。このカウンセラーに対する認識の違いは、カウンセリング活動においてクライアントととの人間関係を形成していくうえで十分な配慮を必要とするものである。

発達の課題については留学生を人生の移行期（山本・ワップナー，1991）にある発達の主体としてとらえ、自我同一性、文化的アイデンティティの修正・確立を援助すべきである。留学生の異文化体験を、マイナスのものとして捉えるのではなく、発達の契機とできるような発達の援助が望まれる。

## (2) 異文化間カウンセリング活動の内容

我々は上記の課題を考慮して、予防的アプローチ（Inoue & Ito, 1993）に立ち、表5のように、グループワークを含むカウンセリング活動に多面的に取り組んできた。

表5 異文化間カウンセリング活動

心理的援助の方法	援助の内容	クライアントの感情表現	心理アセスメント
ピア・カウンセリング	情報提供 (生活/勉強)	日本語でほとんどできない	「サンド・プレー」
グループワーク	異文化理解	(ノンバーバル)	「コラージュ」
グループ・カウンセリング	人間関係 情緒的問題	日本語で少しできる	P F スタディ ロージャルシャッハ
カウンセリング	自己理解	日本語である程度できる	文章完成テスト
心理・精神療法	情緒的問題		

日本語がほとんどできない段階では、日本語による感情表現が十分になされないで、クライアントと同じ母語を話す修了生に働きかけてピア・カウンセリングを行ったり、同国の友人たちとのグループを組織してグループ・ワークを行う。日本語が少しできる段階になってくると、日本語による感情表現も少し可能とな

るので、人間関係や情緒的問題についてグループ・カウンセリングを行う。日本語がある程度できる段階になってくると、かなりの程度日本語による感情表現ができるようになるので、アイデンティティなどの心理的問題についてもカウンセリングを行えるようになる。

ただし、留学生の場合、日本語ができない段階はストレスも強く、カウンセリングの必要性が高いのも事実である。そこで我々は、鈴木・井上（1994）の事例研究で示したように、クライアントとカウンセラーとの間の媒介言語などの言語的な課題を配慮しつつ異文化間カウンセリングを実践・探究してきた。

また、これらのカウンセリング活動には留学生についての理解を深め、より適切に関われるよう、心理アセスメントを投影法を中心に並行して行っている。たとえば言語を使わずに砂・樹木・建物・人形・ミニチュア動物などで表現する「サンド・プレー」や反応語を辞書の助けを借りて表すことのできる「ロールシャッハ」は、しばしばその後のカウンセリングへの有効な導入となっている。

### 3. 留学初年度の適応援助のための介入活動としてのカウンセリング活動の位置づけ

以上、留学生の適応援助におけるカウンセリング活動の意義について検討した。次に、Inoue & Ito (1993)の外国人の異文化適応のための介入活動の枠組から本センターのカウンセリング活動を検討してみよう。

カウンセリング活動を留学生に対応する活動として考えるならば、3つの介入のレベルと活動の目的から6つのものが想定される。3つの介入レベルとは個人レベル、小集団レベル、社会レベルの3つである。これはBronfenbrenner (1979)の生態学的システムと対応して考えることができよう。

まず、マイクロシステムとは当事者である留学生が直接的に経験する場面であり、教室や寮、友人関係などさまざまな直接的な交流とコミュニケーションを媒介としたり、あるいはコミュニケーションそのものが目的となっている活動である。教室で日本文化を教えることも1つのマイクロシステムであり、個別カウンセリングの場合もそれ自体が一つのマイクロシステムである。メゾシステムとはマイクロシステム相互の連関を問題にするレベルである。たとえば、学業不振の問題が教室内の問題とは限らず、原因は人間関係や寮生活の問題であったりする。この観点から援助活動におけるカウンセラーと他の教職員との連携が問題になってくる。エクソシステムは本センターの留学生に対する方針あるいはマスコミの

外国人の取り上げ方というように、留学生自身はその場面にかかわったり参加したり、変更を加えることができないが留学生の経験・思考・行動に影響を与えるレベルである。一番大きなシステムであるマイクロシステムとは国家や社会・共同体のレベルであり、たとえば日本人の国民性とか日本政府の留学政策といったことが問題となるレベルである。

表6 外国人の異文化適応のための介入活動 (Inoue & Ito, 1992)

介入のレベル	生態学的 システムの 場面	活動の目的	
		(a)治療活動	(b)予防活動
(1) 個人に焦点を あてた援助	マイクロ システム	(1 a) ・カウンセリング	(1 b) ・異文化理解教育
(2) 個人+集団 への直接的 介入	マイクロ システム & メゾ システム	(2 a) ・システム内での カウンセリング ・グループワーク	(2 b) ・ソーシャルスキル トレーニング ・予防教育 ・集団創造活動
(3) 個人+集団+ 社会への 構造的介入 の各システム	マイクロ +メゾ +エクソ +マクロ システム	(3 a) ・紛争解決 ・集団間の調停 ・諸機関の間の連携 ・地域社会政策	(3 b) ・集団創造活動 ・地域社会の啓蒙 ・地域計画・制度

\*Bronfenbrenner (1979)によると；

マイクロシステム＝本人が直接経験する場面の最小単位

(例：教室，カウンセリング場面，家庭，労働現場等)

メゾ システム＝マイクロシステム間の相互関係

(例：寮生活と学校生活との関係，地域と学校との関係など)

エクソシステム＝本人からは影響を与えられにくい本人に影響を与えるシステム

(例：学校制度，マスコミなど)

マクロシステム＝本人をとりまく文化・社会・国家

これらの3つの介入レベルには治療を目的とする活動と予防を目的とする活動が考えられる。我々が強調する点は予防的活動である。カウンセリング活動は社会的通念としてもカウンセラーの考え方としても治療的活動を中心とした活動で足りるという考え方がある。しかし、治療しなくてはいけないような問題を未然に防ぐことはカウンセラーの重要な仕事である。留学生が日本社会に受け身的に適応してだけでなく積極的に自己形成していくためには、予防的活動の重要

性を強調したい。たとえば留学生が陥るであろうカルチャーショックを乗り越えさせるための援助として、我々は来日当初のオリエンテーションの時期に、新入生にとって1年先輩にあたる同国出身の修了生にコミュニケーションの媒介者としての役割を持たせ、経験的アドバイスを話してもらい形で母語によるグループワークを行っている。また、寮内の学生の活動では、自治組織としての学生委員会を組織化し、日本語新聞作り、パーティでの交流活動、運動会などの行事の企画運営、等が学生の手で行われるよう指導援助した。これは、O'Donnell等(1992)の提唱する「集団創造活動」(Joint Productive Activity)の実現の一例である。

さらに留学生の適応と彼等の有する日本人観との関連で予防的カウンセリング活動の重要性が指摘される。本センターの留学生は日本人との交流が狭い範囲に限られているので、そういう人間関係でつまずくと固定的日本人観やマイナス・イメージを持ちがちである。たとえば、本センター教職員や「日本のお母さん」(留学生の希望者に対して日本の母親代わりとなる女性ボランティアが進める「留学生の母親運動」)などの身近な人間関係との間に行き違いが起こった場合などである。そのような個人的な体験が留学生のカルチャーショックを深刻化させるといったケースがある。また、ホームステイ先の経験から日本文化への固定イメージを形成し、不適応感をつのらせたりするケースもある。そこで、生活指導部門では、留学生本人だけでなく、担当教官・事務職員、さらにはボランティアの人たちと話し合い、留学生とどのように対応したらよいかについてアドバイスをする活動を重視して行ってきた。この活動は、精神保健の立場でいわれるところの「コンサルテーション機能」(註2参照)にあたるものである。

また、本センターの留学生と他大学の日本人学生との交流(たとえば共同の田植えの体験学習)や、地域の府中市主催の青少年合唱祭へ留学生全員が出場するなど、地域住民との交流を行ってきた。地域と本センターとのメゾシステムに働きかける指導の一環であるこれらの指導は、いわゆる狭義のカウンセリング活動といえない。しかし、留学生の日本社会への理解と経験を豊かにし、不適応事態を予防するという意義があり、発達援助活動にとっての意義がきわめて大きい。全学生が参加するこのような取り組みは、全教職員の理解と協力と参加のもとに、今後も大いに進めていくべき全学的な教育課題であろう。

以上をまとめると、留学生援助においても1a、2aの対症療法的な治療活動のみならず、地域社会を視野に入れた異文化理解教育(1b)や、田中・藤原

(1992)の提唱するソーシャルスキル・トレーニング的な指導(2b)およびO'Donnell等(1992)のいう「集団創造活動」(2b)などのいわば予防的な活動が求められよう。さらに他機関との連携、地域・社会の制度・政策の改善などのマクロ的視野からも、留学生の適応援助のための介入活動としてのカウンセリング活動の意義を位置づけることが必要であろう。

### まとめにかえて

現在(1993年10月)、日本の国立大学のなかで留学生のための生活指導部門が設けられ、専任教官が複数配置されている教育機関は本センターのみである。その事情のもとで、本研究では、留学初年度の生活指導におけるカウンセリング活動の意義を検討した。相談内容の分析その他より、留学生の生活指導、すなわち適応援助のためのカウンセリング活動が決定的に重要な位置を占めることが明らかとなった。また、在日1年目の留学生のカウンセリング活動にとっては、言語の未習得、文化差、発達の課題に対応するとともに、カウンセリング活動を狭義の治療的活動のみとしてとらえるのではなく、カウンセリング担当教官はそれを中心課題としながらも相談室から出て働きかけていく予防的活動も重視すべきであることを本センターでの実践をもとに示した。

日本の大学での学業の成功のため、学生の現在の学力を向上させるための教育的課題と、学生が日本での文化社会的条件のもとで留学生・人間としての発達を実現していくための教育的課題はともに、前者がおもに教科指導、後者がおもに生活指導という場面で実現されるという違いはあれ、全教職員が協力して実現しなくてはならない課題である。本センターの生活指導部門では、部門発足からの歴史が浅いため、部門の担当教官が直接的に分担する課題と、コンサルテーションその他の方法で媒介的に責任を持つ課題とを整理することも今後必要となつてこよう。

(註1) カウンセリングの隣接領域における対人援助専門職が用いる技術としてソーシャルワーク、精神分析を含む心理療法、精神療法などがある(図2)。いずれも面接を主たる手段にし、原則として個別に行う点で共通している。それらは社会的不適応、情緒障害を対象とするため、より高度の経験と技術が必要である。カウンセリングと心理療法、精神療法についてはその異同が一定していない。

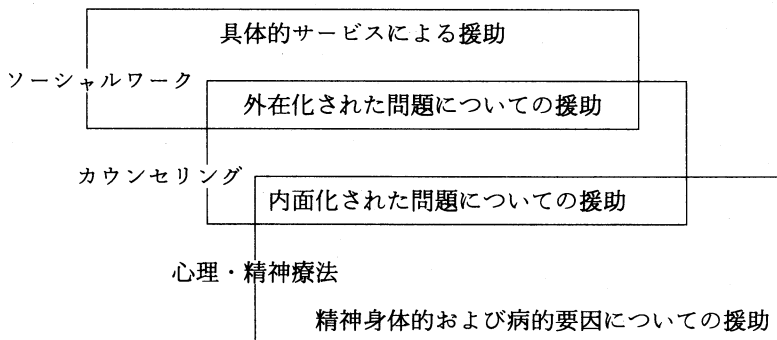


図2 奥田（1991）を参考に作図

（註2）奥田（1991）によれば、対人援助技術に関連する用語として、カウンセリングのほかにはガイダンス、コンサルテーション、心理療法、精神療法、ケースワークがある。コンサルテーションとは他機関、他部門の専門家との相談協議をいう。コンサルタント（ある分野に専門的な知識や理解をもち、専門的な対処方法を知っている人）がコンサルティ（依頼者：クライアントではないがクライアントの関わりのある人）の疑問、悩みなどに情報を提供したり、解決方法についての助言を与え、問題解決の援助をすること。

## 文献

浅野 誠（1986） 今日における生活指導研究の課題。

生活指導研究， 3， 5-20.

Bronfenbrenner, U. B. (1979) The ecology of human development.

Cambridge : Harvard University Press.

星野 命（1992） クロス・カルチャ思考への招待．読売新聞社 104-106

Inoue, T., Ito, T. (1993). Acculturation problems of foreigners in Japan.

*Japanese Health Psychology*, 2, 64-74.

井上孝代，鈴木康明（1993） 留学生援助におけるカウンセリング活動の位置づけ．異文化教育学会第14回大会発表抄録．48-49.

岩男寿美子・荻原滋（1988） 日本で学ぶ留学生．勁草書房 pp26-28, p42.

神保信一（1993） カウンセリング辞典（国分康孝編） 「発達の（開発的）カウンセリング」 誠信書房 p.74.

- Lysgaard, S. (1956) Adjustment in a foreign society : Norwegian Fullbright grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*, 5, 45-51.
- 中川作一 (1992) 自己像の国際比較.  
日本社会心理学会第33回大会発表論文集, 424-425.
- O'Donnell, C. R., Tharp, R. G., & Wilson, K. (1992). Community intervention and youth development. *ISSSBD Newsletter*, 21, 1-4.
- 大塚芳子 (1993) カウンセリング力を問う, 異文化間カウンセリング.  
日本心理学会第57回大会発表論文集, P66.
- 奥田いさよ (1991) 対人援助のカウンセリング. 川島書店. pp.12-14
- 佐野秀樹 (1990) 留学生の適応とクロスカルチュラル・カウンセリング  
カウンセリング研究, 23, 112.
- 鈴木康明, 井上孝代 (1993) 留学生とカウンセリング(1)—日本人イメージの特徴と変化からみたカウンセリングを行う際の留意点—.  
東京外国語大学留学生日本教育センター論集, 第19号, 187-206.
- 鈴木康明・井上孝代 (1994) 留学生とカウンセリング(2):  
言葉の問題を契機に自己評価が下がった男子留学生の事例  
東京外国語大学留学生日本語教育センター論集, 第20号, 印刷中.
- 田中共子・松尾 馨 (1993) 異文化欲求不満に関する事例研究  
広島大学留学生センター紀要, 4, (印刷中)
- 田中共子・藤原武弘 (1992) 在日外国人留学生の対人行動上の困難: 異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討  
社会心理学研究, 7(2), 92-101.
- Thomas, K. & Althen, G. (1989). Counseling foreign students.  
In Pedersen, P. B., Draguns, J. G., Lonner, W. J., & Trimble, J. E. (Eds.). *Counseling across cultures*. (3rd ed.) Honolulu : University of Hawaii Press. pp.205-241, p.228.
- 山本多喜司・ワップナー, S (編) (1991) 人生移行の発達心理学 北大路書房  
pp.15-22.
- 横田雅弘 (1992) 在日留学生への異文化オリエンテーション・プログラム.  
渡辺文夫 (編) 現代のエスプリ: 国際化と異文化教育 (299号),  
pp.109-117

## International Students and Counseling in Japan (3)

### —Counseling activities for the first year international students in Japan —

INOUE Takayo & SUZUKI Yasuaki

The aim of the present paper is to report and discuss counseling activities for first year international students by the staff of Division of Counseling and Guidance, Japanese Language Center for International Students, Tokyo University of Foreign Studies. The Center provides preparatory education for a year including Japanese language teaching for students with scholarship by Japanese Ministry of Education to enter a national university in Japan next year. One thousand sixty-four items of counseling activities for the fifty-one students were reported and classified as (1) psychological counseling (24.9%), (2) consultation for school/dormitory life (19.3%), (3) guidance and orientation (16.1%), (4) advice for cross-cultural interaction (13.8%), (5) supply of skill and information (12.0%), (6) emotional support (8.5%), and (7) others(4.5%).

Cross-cultural counseling for first year students involves three important problems: understanding with limited linguistic communication, cultural difference between a counselor and a student, and developmental task of students in their course of life. As for methods of cross-cultural counseling for students with limited Japanese ability, peer counseling and group work with bilingual students as well as group counseling were found effective. The meaning of counseling activities for first year international students was discussed in the framework of Intervention Activity for Acculturation of Foreigners by Inoue & Ito (1993).